

ヘブル人への手紙

第一章

「神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、この終りの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め、また、御子によって、もろもろの世界を造られた。御子は神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿であって、その力ある言葉をもって万物を保っておられる。そして罪のきよめのわざをなし終えてから、いと高き所にいます大能者の右に、座につかれたのである。御子は、その受け継がれた名が御使たちの名にまさっているのです。彼らよりもすぐれた者となられた。五いつたい、神は御使たちのだれに対して、

「あなたこそは、わたしの子。」

きょう、わたしはあなたを生んだ」

と言ひ、さらにまた、

「わたしは彼の父となり、

彼はわたしの子となるであらう」

と言われたことがあるか。さらにまた、神は、その長子を世界に導き入れるに當つて、

「神の御使たちはことごとく、彼を拝すべきである」

と言われた。また、御使たちについては、

「神は、御使たちを風とし、

ご自分に仕える者たちを炎とされる」

と言われているが、御子については、

「神よ、あなたの御座は、世々限りなく続き、

あなたの支配のつえは、公平のつえである。

あなたは義を愛し、不法を憎まれた。

それゆえに、神、あなたの神は、喜びのあぶらを、

あなたの友に注ぐよりも多く、あなたに注がれた」

と言ひ、さらに、

「主よ、あなたは初めに、地の基をおすえになった。

もろもろの天も、み手のわざである。

これらのものは滅びてしまふが、

あなたは、いつまでもいますかたである。

すべてのものは衣のように古び、

それらをあなたは、外套のように巻かれる。

これらのものは、衣のように変るが、

あなたは、いつも変わることがなく、

あなたのよわいは、尽きることがない」

とも言われている。神は、御使たちのだれに対して、

「あなたの敵を、あなたの足台とするときまでは、

わたしの右に座していなさい」

と言われたことがあるか。御使たちはすべて仕える霊

であつて、救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つか

わされたものではないか。

第二章 「こういうわけだから、わたしたちは聞かされていることを、いつそう強く心に留めねばならない。そうでないと、おし流されてしまう。二というのは、御使たちをおして語られた御言が効力を持ち、あらゆる罪過と不従順とに対して正当な報いが加えられたとすれば、三わたしたちは、こんなに尊い救をなおざりにしては、どうして報いをのがれることができようか。この救は、初め主によって語られたものであって、聞いた人々からわたしたちにあかしされ、四さらに神も、しるしと不思議とさまざまな力あるわざとにより、また、御旨に従い聖霊を各自に賜うことによつて、あかしをされたのである。

五「いったい、神は、わたしたちがここで語っているきたるべき世界を、御使たちに服従させることは、なさらなかつた。六聖書はある箇所、こうあかししている、

「人間が何者だから、

これを御心に留められるのだろうか。

人の子が何者だから、

これをかえりみられるのだろうか。

七あなた、しばらくの間、

彼を御使たちよりも低い者となし、

栄光とほまれとを冠として彼に与え、

八万物をその足の下に服従させて下さった」。

「万物を彼に服従させて下さった」という以上、服従し

ないものは、何ひとつ残されていないはずである。しかし、今もなお万物が彼に服従している事実を、わたしたちは見ていない。九ただ、「しばらくの間、御使たちよりも低い者とされた」イエスが、死の苦しみのゆえに、栄光とほまれとを冠として与えられたのを見る。それは、彼が神の恵みによつて、すべての人のために死を味わわれるためであつた。一〇なぜなら、万物の帰すべきかた、万物を造られたかたが、多くの子らを栄光に導くのに、彼らの救の君を、苦難をおして全うされたのは、彼にふさわしいことであつたからである。二実に、きよめられたも、きよめられる者たちも、皆ひとりのかたから出ている。それゆえに主は、彼らを兄弟と呼ぶことを恥とされない。二三すなわち、

「わたしは、御名をわたしの兄弟たちに告げ知らせ、教会の中で、あなたをほめ歌おう」と言い、二四また、

「わたしは、彼により頼む」、

また、

「見よ、わたしと、神がわたしに賜わった子らとは」と言われた。二五このように、子たちは血と肉とに共にあずかっているのです、イエスもまた同様に、それらをそなえておられる。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によつて滅ぼし、二六死の恐怖のために一

生涯、奴隷となつていた者たちを、解き放つためである。一六確かに、彼は天使たちを助けることはしないで、アブラハムの子孫を助けられた。一七そこで、イエスは、神のみまえにあわれみ深い忠実な大祭司となつて、民の罪をあがなうために、あらゆる点において兄弟たちと同じようにならねばならなかった。一八主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである。

第三章 「そこで、天の召しにあずかつている聖なる兄弟たちよ。あなたがたは、わたしたちが告白する信仰の使者また大祭司なるイエスを、思いみるべきである。二彼は、モーセが神の家の全体に対して忠実であつたように、自分を立てたかたに対して忠実であられた。三おおよそ、家を造る者が家そのものよりもさらに尊ばれるように、彼は、モーセ以上に、大いなる光栄を受けるにふさわしい者とされたのである。四家はすべて、だれかによつて造られるものであるが、すべてのものを造られたかたは、神である。五さて、モーセは、後に語らるべき事についてあかしをするために、仕える者として、神の家の全体に対して忠実であつたが、六キリストは御子として、神の家を治めるのに忠実であられたのである。もしわたしたちが、望みの確信と誇とを最後までしっかりと持ち続けるなら、わたしたちは神の家なのである。七だから、聖霊が言っているように、

「きよう、あなたがたがみ声を聞いたなら、八荒野における試練の日に、神にそむいた時のように、あなたがたの心を、かたくなにしてはいけない。九あなたがたの先祖たちは、そこでわたしを試みためし、一〇しかも、四十年の間わたしのわざを見たのである。だから、わたしはその時代の人々に対して、いきどおつて言った、彼らの心は、いつも迷つており、彼らは、わたしの道を認めなかった。二そこで、わたしは怒つて、彼らをわたしの安息にいらせることはしない、と誓つた。三兄弟たちよ。気をつけなさい。あなたがたの中には、あるいは、不信仰な悪い心をいだいて、生ける神から離れる者があるかも知れない。四あなたがたの中に、罪の惑わしに陥つて、心をかたくなにする者がないように、「きよう」といううちに、日々、互に励まし合いなさい。五もし最初の確信を、最後までしっかりと持ち続けるならば、わたしたちはキリストにあずかる者となるのである。六それについて、こう言われている、七「きよう、み声を聞いたなら、神にそむいた時のように、あなたがたの心を、かたくなにしてはいけない。」

「すると、聞いたのにそむいたのは、だれであつたのか。モーセに率いられて、エジプトから出て行つたすべての人々ではなかつたか。七また、四十年の間、神がいきどおられたのはだれに對してであつたか。罪を犯して、その死かばねを荒野にさらした者たちに對してではなかつたか。八また、神が、わたしの安息に、はいらせることはしない、と誓われたのは、だれに向かつてであつたか。不従順な者に向かつてではなかつたか。九こうして、彼らがいふことのできなかつたのは、不信仰のゆゑであることがわかる。

第四章 「それだから、神の安息にはいるべき約束が、まだ存続しているにかかわらず、万一にも、はいりそこなう者が、あなたがたの中から出ることがないように、注意しようではないか。二というのは、彼らと同じく、わたしたちにも福音が伝えられているのである。しかし、その聞いた御言は、彼らには無益であつた。それが、聞いた者たちに、信仰によつて結びつけられなかつたからである。三ところが、わたしたち信じている者は、安息にはいることができる。それは、

「わたしが怒つて、
彼らをわたしの安息に、はいらせることはしないと、
誓つたように」

と言われているとおりである。しかも、みわざは世の初めに、でき上がっていた。四すなわち、聖書のある箇所

で、七日目のことについて、「神は、七日目にすべてのわざをやめて休まれた」と言われており、五またここで、「彼らをわたしの安息に、はいらせることはしない」と言われている。六そこで、その安息にはいる機会が、人になお残されているのであり、しかも、初めに福音を伝えられた人々は、不従順のゆゑに、はいることをしなかつたのであるから、七神は、あらためて、ある日を「きよう」として定め、長く時がたつてから、先に引用したとおり、

「きよう、み声を聞いたなら、

あなたがたの心を、かたくなにしてはいけない」とダビデをとおして言われたのである。八もしヨシュアが彼らを休ませていたとすれば、神はあとになって、ほかの日のことについて語られたはずはない。九かういうわけで、安息日の休みが、神の民のためにまだ残されているのである。一なぜなら、神の安息にはいつた者は、神がみわざをやめて休まれたように、自分もわざを休んだからである。二したがって、わたしたちは、この安息にはいるように努力しようではないか。そうでないと、同じような不従順の悪例にならつて、落ちて行く者が出るかもしれない。三というのは、神の言は生きていて、力があり、もろ刃のつるぎよりも鋭くて、精神と靈魂と、関節と骨髓とを切り離すまでに刺しとおして、心の思いと志とを見分けることができる。四そして、神のみまえ

には、あらわでない被造物はひとつもなく、すべてのものは、神の目には裸であり、あらわにされているのである。この神に対して、わたしたちは言い開きをしなくてはならない。

「さて、わたしたちには、もろもろの天をとおって行かれた大祭司なる神の子イエスがいますのであるから、わたしたちの告白する信仰をかたく守ろうではないか。」「この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。」「だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか。」

第五章

「大祭司なるものはすべて、人間のなかから選ばれて、罪のために供え物といけにえとをささげるように、人々のために神に仕える役に任じられた者である。」「彼は自分自身、弱さを身に負うているので、無知な迷っている人々を、思いやることができると共に、その弱さのゆえに、民のためだけではなく自分自身のためにも、罪についてささげものをしなければならぬのである。」「かつ、だれもこの榮譽ある務を自分で得るのではなく、アロンの場合のように、神の召しによって受けるのである。」「同様に、キリストもまた、大祭司の

榮譽を自分で得たのではなく、

「あなたこそは、わたしの子。」

きよう、わたしはあなたを生んだ」

と言われたかたから、お受けになったのである。」「また、ほかの箇所でもう言われている、

「あなたこそは、永遠に、

メルキゼデクに等しい祭司である」。

「キリストは、その肉の生活の時には、激しい叫びと涙とをもって、ご自分を死から救う力のあるかたに、祈と願いとをささげ、そして、その深い信仰のゆえに聞かれられたのである。」「彼は御子であられたにもかかわらず、さまざまの苦しみによって従順を学び、そして、全き者とされたので、彼に従順であるすべての人に対して、永遠の救の源となり、神によって、メルキゼデクに等しい大祭司と、となえられたのである。」

「このことについては、言いたいことがたくさんあるが、あなたがたの耳が鈍くなっているので、それを説き明かすことはむずかしい。」「あなたがたは、久しい以前からすでに教師となっているはずなのに、もう一度神の言の初歩を、人から手ほどきしてもらわねばならない始末である。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要としている。」「三すべて乳を飲んでゐる者は、幼な子なのだから、義の言葉を味わうことができない。」「四しかし、堅い食物は、善悪を見わける感覚を実際に働かせて訓練さ

れた成人のとるべきものである。

第六章 一 そういうわけだから、わたしたちは、キリストの教の初歩をあとし、完成を目ざして進むうではないか。今さら、死んだ行いの悔改めと神への信仰、二洗いごとについての教と按手、死人の復活と永遠のさばき、などの基本の教をくりかえし学ぶことをやめようではないか。三神の許しを得て、そうすることにしよう。四いったん、光を受けて天よりの賜物を味わい、聖霊にあずかる者となり、五また、神の良き言葉と、きたるべき世の力とを味わった者たちが、六そののち墮落した場合には、またもや神の御子を、自ら十字架につけて、さらしものにするわけであるから、ふたたび悔改めにたち帰ることは不可能である。七たとえば、土地が、その上にたびたび降る雨を吸い込んで、耕す人々に役立つ作物を育てるなら、神の祝福にあずかる。八しかし、いばらやあざみをはえさせるなら、それは無用になり、やがてのろわれ、ついには焼かれてしまう。

九しかし、愛する者たちよ。こうは言うものの、わたしたちは、救にかかわる更に良いことがあるのを、あなたがたについて確信している。一〇神は不義なかたではないから、あなたがたの働きや、あなたがたがかつて聖徒に仕え、今もなお仕えて、御名のために示してくれた愛を、お忘れになることはない。二わたしたちは、あなたがたがひとり残らず、最後まで望みを持ちつづけるため

にも、同じ熱意を示し、三怠ることがなく、信仰と忍耐をもつて約束のものを受け継ぐ人々に見習う者となるように、と願ってやまない。

三さて、神がアブラハムに対して約束されたとき、さして誓うのに、ご自分よりも上のものがないので、ご自分をさして誓って、四「わたしは、必ずあなたを祝福し、必ずあなたの子孫をふやす」と言われた。五このようにして、アブラハムは忍耐強く待ったので、約束のものを得たのである。六いったい、人間は自分より上のものをさして誓うのであり、そして、その誓いはすべての反対論を封じる保証となるのである。七そこで、神は、約束のものを受け継ぐ人々に、ご計画の不变であることを、いつそうはつきり示そうと思われ、誓いによって保証されたのである。八それは、偽ることのあり得ない神に立てられた二つの不変の事によって、前におかれていた望みを捕えようとして世をのがれてきたわたしたちが、力強い励ましを受けるためである。九この望みは、わたしたちにとって、いわば、たましいを安全にし不動にする錨であり、かつ「幕の内」にはいり行かせるものである。一〇その幕の内に、イエスは、永遠にメルキゼデクに等しい大祭司として、わたしたちのためにさきがけとなつて、はいられたのである。

第七章 一 このメルキゼデクはサレムの王であり、いと高き神の祭司であつたが、王たちを撃破して帰

るアブラハムを迎えて祝福し、二それに対して、アブラハムは彼にすべての物の十分の一を分け与えたのである。その名の意味は、第一に義の王、次にまたサレムの王、すなわち平和の王である。三彼には父がなく、母がなく、系図がなく、生涯の初めもなく、生命の終りもなく、神の子のようであつて、いつまでも祭司なのである。四そこで、族長のアブラハムが最もよいぶんどり品の十分の一を与えたのだから、この人がどんなにすぐれた人物であつたかが、あなたがたにわかるであらう。五さて、レビの子のうちで祭司の務をしている者たちは、兄弟である民から、同じくアブラハムの子孫であるにもかかわらず、十分の一を取るように、律法によって命じられてゐる。六ところが、彼らの血統に属さないこの人が、アブラハムから十分の一を受けとり、約束を受けてゐる者を祝福したのである。七言うまでもなく、小なる者が大なる者から祝福を受けるのである。八その上、一方では死ぬべき人間が、十分の一を受けてゐるが、他方では「彼は生きてゐる者」とあかしされた人が、それを受けてゐる。九そこで、十分の一を受け取るべきレビでさえも、アブラハムを通じて十分の一を納めた、と言へる。一〇なぜなら、メルキゼデクがアブラハムを迎えた時には、レビはまだこの父祖の腰の中にいたからである。二もし全うされることがレビ系の祭司制によって可能であつたら——民は祭司制の下に律法を与えられたので

あるが———なんの必要があつて、なお、「アロンに等しい」と呼ばれない、別な「メルキゼデクに等しい」祭司が立てられるのであるか。三祭司制に変更があれば、律法にも必ず変更があるはずである。四さて、これらのことは、いまだかつて祭壇に奉仕したことのない、他の部族に関して言われているのである。五というのは、わたしたちの主がユダ族の中から出られたことは、明らかであるが、モーセは、この部族について、祭司に関することでは、ひとことも言っていない。六そしてこの事は、メルキゼデクと同様な、ほかの祭司が立てられたことによつて、ますます明白になる。七彼は、肉につける戒めの律法によらないで、朽ちることのないいのちの力によつて立てられたのである。八それについては、聖書に「あなたこそは、永遠に、メルキゼデクに等しい祭司である」とあかしされてゐる。九このようにして、一方では、前の戒めが弱くかつ無益であつたために無効になると共に、一〇（律法は、何事をも全うし得なかつたからである）、他方では、さらにすぐれた望みが現れてきて、わたしたちを神に近づかせるのである。二〇その上に、このことは誓いをもつてなされた。人々は、誓いをしないで祭司とされるのであるが、三この人の場合は、次のような誓いをもつてされたのである。すなわち、彼について、こう言われている、「主は誓われたが、心を変えることをされなかつた。あなたこそは、永遠に祭司である」。

三 このようにして、イエスは更にすぐれた契約の保証となられたのである。三 かつ、死ということがあるために、務を続けることができないので、多くの人々が祭司に立てられるのである。二四 しかし彼は、永遠にいますかたであるので、変らない祭司の務を持ちつづけておられるのである。二五 そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に來る人を、いつも救うことができるのである。

二六 このように、聖にして、惡も汚れもなく、罪人とは區別され、かつ、もろもろの天よりも高くされてゐる大祭司こそ、わたしたちにとってふさわしいかたである。二七 彼は、ほかの大祭司のように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために、日々、いけにえをささげる必要はない。なぜなら、自分をささげて、一度だけ、それをさしたからである。二八 律法は、弱さを身に負う人間を立てて大祭司とするが、律法の後にきた誓いの御言は、永遠に全うされた御子を立てて、大祭司としたのである。

第八章 一 以上述べたことの要点は、このような大祭司がわたしたちのためにおられ、天にあつて大能者の御座の右に座し、二 人間によらず主によって設けられた真の幕屋なる聖所で仕えておられる、ということである。三 おおよそ、大祭司が立てられるのは、供え物やいけにえをささげるためにほかならない。したがって、この大祭司もまた、何かささぐべき物を持っておられね

ばならない。四 そこで、もし彼が地上におられたなら、律法にしたがつて供え物をささげる祭司たちが、現にゐるのだから、彼は祭司ではあり得なかつたであらう。五 彼らは、天にある聖所のひな型と影とに仕えてゐる者にすぎない。それについては、モーセが幕屋を建てようとしたとき、御告げを受け、「山で示された型どおりに、注意してそのいっさいを作りなさい」と言われたのである。六 ところがキリストは、はるかにすぐれた務を得られたのである。それは、さらにまさつた約束に基いて立てられた、さらにまさつた契約の仲保者となられたことによる。七 もし初めの契約に欠けたところがなかつたら、あとのものが立てられる余地はなかつたであらう。八 ところが、神は彼らを責めて言われた、

「主は言われる、見よ、

わたしがイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ日が来る。

九 それは、わたしが彼らの先祖たちの手をとつて、

エジプトの地から導き出した日に、

彼らと結んだ契約のようなものではない。

彼らがわたしの契約にとどまることをしないので、

わたしも彼らをかえりみなかつたからであると、

主が言われる。

一〇 わたしが、それらの日の後、イスラエルの家と立てようとする契約はこれである、と主が言われる。

すなわち、わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、
彼らの心に書きつけよう。

こうして、わたしは彼らの神となり、
彼らはわたしの民となるであらう。

二 彼らは、それぞれ、その同胞に、

また、それぞれ、その兄弟に、

主を知れ、と言って教えることはなくなる。

なぜなら、大なる者から小なる者に至るまで、
彼らはことごとく、

わたしを知るようになるからである。

三 わたしは、彼らの不義をあわれみ、

もはや、彼らの罪を思い出すことはしない。

三 神は、「新しい」と言われたことによって、初めの契

約を古いとされたのである。年を経て古びたものは、や

がて消えていく。

第九 章 一 さて、初めの契約にも、礼拝につい

てのさまざまな規定と、地上の聖所とがあった。二 すな

わち、まず幕屋が設けられ、その前の場所には燭台と机

と供えのパンとが置かれていた。これが、聖所と呼ばれ

た。三 また第二の幕の後に、別の場所があり、それは至

聖所と呼ばれた。四 そこには金の香壇と全面金でおおわ

れた契約の箱とが置かれ、その中にはマナのはいつてい

る金のつぼと、芽を出したアロンのつえと、契約の石板

とが入れてあり、五 箱の上には栄光に輝くケルビムが

あつて、贖罪所をおおっていた。これらのことについて
は、今ここで、いちいち述べることはできない。六 これ

らのものが、以上のように整えられた上で、祭司たちは
常に幕屋の前の場所にはいつて礼拝をするのであるが、

七 幕屋の奥には大祭司が年に一度だけはいるのであり、

しかも自分自身と民とのあやまちのためにささげる血を

たずさえないで行くことはない。八 それによって聖霊は、

前方の幕屋が存在している限り、聖所にはいる道はまだ

開かれていないことを、明らかに示している。九 この幕

屋というのは今の時代に対する比喩である。すなわち、

供え物やいけにえはささげられるが、儀式にたずさわる

者の良心を全うすることはできない。一〇 それらは、ただ

食物と飲み物と種々の洗ひごに關する行事であつて、

改革の時まで課せられていた肉の規定にすぎない。

二 しかしキリストがすでに現れた祝福の大祭司として

こられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さ

らに大きく、完全な幕屋をとり、三 かつ、やぎと子牛

との血によらず、ご自身の血によって、一度だけ聖所に

はいられ、それによって永遠のあがないを全うされたの

である。四 もし、やぎや雄牛の血や雌牛の灰が、汚れた

人たちの上にまきかけられて、肉体をきよめ聖別すると

すれば、五 永遠の聖霊によって、ご自身を傷なき者とし

て神にささげられたキリストの血は、なおさら、わたし

たちの良心をきよめて死んだわざを取り除き、生ける神

に仕える者としなないであろうか。二五それだから、キリストは新しい契約の仲保者なのである。それは、彼が初めの契約のもとで犯した罪過をあがなうために死なれた結果、召された者たちが、約束された永遠の国を受け継ぐためにほかならない。

二六いったい、遺言には、遺言者の死の証明が必要である。二七遺言は死によつてのみその効力を生じ、遺言者が生きてゐる間は、効力がない。二八だから、初めの契約も、血を流すことなしに成立したのではない。二九すなわち、モーセが、律法に従つてすべての戒めを民全体に宣言したとき、水と赤色の羊毛とヒソブとの外に、子牛とやぎとの血を取つて、契約書と民全体とにふりかけ、三〇そして、「これは、神があなたがたに対して立てられた契約の血である」と言つた。三一彼はまた、幕屋と儀式用の器具いっさいにも、同様に血をふりかけた。三二こうして、ほとんどすべての物が、律法に従ひ、血によつてきよめられたのである。血を流すことなしには、罪のゆるしはあり得ない。

三三このように、天にあるもののひな型は、これらのものできよめられる必要があるが、天にあるものは、これらより更にすぐれたいけにえで、きよめられねばならない。三四ところが、キリストは、ほんとうのものの模型にすぎない、手で造つた聖所にはいらないうで、上なる天にいらり、今やわたしたちのために神のみまえに出て下

さつたのである。三五大祭司は、年ごとに、自分以外のものの血をたずさえて聖所にはいるが、キリストは、そのように、たびたびご自身をささげられるのではなかった。三六もしそうだとすれば、世の初めから、たびたび苦難を受けねばならなかつたであらう。しかし事実、ご自身をいけにえとしてささげて罪を取り除くために、世の終りに、一度だけ現れたのである。三七そして、一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることとが、人間に定まつてゐるように、三八キリストもまた、多くの人の罪を負うために、一度だけご自身をささげられた後、彼を待ち望んでゐる人々に、罪を負うためではなしに二度目に現れて、救を与えられるのである。

第一章 ○ 二六 一 いったい、律法はきたるべき良いことの影をやどすにすぎず、そのものの真のかたちをそなへてゐるものではないから、年ごとに引きつづきささげられる同じようないけにえによつても、みまえに近づいて来る者たちを、全うすることはできないのである。二もしできたとすれば、儀式にたずさわる者たちは、一度きよめられた以上、もはや罪の自覚がなくなるのであるから、ささげ物をする必要がなくなったはずではあるまいか。三しかし実際は、年ごとに、いけにえによつて罪の思い出がよみがえつて来るのである。四なぜなら、雄牛ややぎなどの血は、罪を除き去ることができないからである。五それだから、キリストがこの世にこられたと

き、次のように言われた、

「あなたは、いけにえやささげ物を望まれないで、わたしのために、からだを備えて下さった。」

六 あなたは燔祭や罪祭を好まれなかった。

七 その時、わたしは言った、

『神よ、わたしにつき、

巻物の書物に書いてあるとおり、

見よ、御旨を行うためにまいりました』。

八 ここで、初めに、「あなたは、いけにえとささげ物と燔祭と罪祭と（すなわち、律法に従ってささげられるもの）を望まれず、好まれもしなかった」とあり、次に、「見よ、わたしは御旨を行うためにまいりました」とある。すなわち、彼は、後のものを立てるために、初めのものを廃止されたのである。二〇 この御旨に基きた一度イエス・キリストのからだがささげられたことによつて、わたしたちはきよめられたのである。

二一 こうして、すべての祭司は立つて日ごとに儀式を行い、たびたび同じようないけにえをささげるが、それらは決して罪を除き去ることはできない。三しかるに、キリストは多くの罪のために一つの永遠のいけにえをささげた後、神の右に座し、三それから、敵をその足台とするときまで、待っておられる。四 彼は一つのささげ物によつて、きよめられた者たちを永遠に全うされたのである。五 聖霊もまた、わたしたちにあかしをして、

一六 わたしが、それらの日の後、

彼らに対して立てようとする契約はこれであると、

主が言われる。

わたしは律法を彼らの心に与え、

彼らの思いのうちに書きつけよう」

と云い、一七 さらに、「もはや、彼らの罪と彼らの不法とを、思い出すことはしない」と述べている。一八 これらのことに対するゆるしがある以上、罪のためのささげ物は、もはやあり得ない。

一九 兄弟たちよ。こういうわけで、わたしたちはイエスの血によつて、はばかりことなく聖所にはいることができる。二〇 彼の肉体なる幕をとり、わたしたちのために開いて下さった新しい生きた道をとおつて、はいって行くことができるのであり、二三さらに、神の家を治める大いなる祭司があるのだから、三三心はすすがれて良心のとがめを去り、からだは清い水で洗われ、まごころをもつて信仰の確信に満たされつつ、みまえに近づこうではないか。三三 また、約束をして下さったのは忠実な方であるから、わたしたちの告白する望みを、動くことなくしっかりと持ち続け、三四 愛と善行とを励むように互に努め、三五 ある人たちがいつもしているように、集会をやめることはしないで互に励まし、かの日が近づいているのを見て、ますます、そうしようではないか。

二六 もしわたしたちが、真理の知識を受けたのちにもな

お、ことさらに罪を犯しつづけるなら、罪のためのいけにえは、もはやあり得ない。三六ただ、さばきと、逆らう者たちを焼きつくす激しい火とを、恐れつつ待つことだけが、ある。三八モーセの律法を無視する者が、あわれみを受けることなしに、二、三の人の証言に基いて死刑に処せられるとすれば、三九神の子を踏みつけ、自分がきよめられた契約の血を汚れたものとし、さらに恵みの御霊を侮る者は、どんなにか重い刑罰に価することであろう。四〇「復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する」と言われ、また「主はその民をさばかれる」と言われたかたを、わたしたちは知っている。四一生ける神のみ手のうちに落ちるのは、恐ろしいことである。

四二あなたかたは、光に照されたのち、苦しい大きな戦いによく耐えた初めのころのことを、思い出してほしい。四三もしられ苦しめられて見せ物にされたこともあれば、このようなめに会った人々の仲間になれたこともあった。四四さらに獄に入れられた人々を思いやり、また、もつとまさった永遠の宝を持つてゐることを知って、自分の財産が奪われても喜んでそれを忍んだ。四五だから、あなたがたは自分の持つてゐる確信を放棄してはいけない。その確信には大きな報いが伴つてゐるのである。四六神の御旨を行つて約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは、忍耐である。

四七「もうしばらくすれば、

きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない。

三八わが義人は、信仰によって生きる。

三九もし信仰を捨ててゐるなら、

わたしのためしはこれを喜ばない。

四〇しかしわたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に立つて、いのちを得る者である。

第一章 さて、信仰とは、望んでゐる事

を確認し、まだ見ていない事実を確認することである。

四一昔の人たちは、この信仰のゆえに賞賛された。四二信仰

によつて、わたしたちは、この世界が神の言葉で造られ

たのであり、したがつて、見えるものは現れてゐるもの

から出てきたのでないことを、悟るのである。四三信仰に

よつて、アベルはカインよりもまさつたいけにえを神に

ささげ、信仰によつて義なる者と認められた。神が、彼

の供え物をよしとされたからである。彼は死んだが、信

仰によつて今なお語つてゐる。四四信仰によつて、エノ

クは死を見ないやうに天に移された。神がお移しになつ

たので、彼は見えなくなった。彼が移される前に、神に

喜ばれた者と、あかしされてゐたからである。四五信仰が

なくては、神に喜ばれることはできない。なぜなら、神

に来る者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報

いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。

四六信仰によつて、ノアはまだ見ていない事からについて

御告げを受け、恐れかしこみつつ、その家族を救うために箱舟を造り、その信仰によって世の罪をさばき、そして、信仰による義を受け継ぐ者となった。八信仰によって、アブラハムは、受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、それに従い、行く先を知らないで出て行った。九信仰によって、他国にいろようにして約束の地に宿り、同じ約束を継ぐイサク、ヤコブと共に、幕屋に住んだ。一〇彼は、ゆるがぬ土台の上に建てられた都を、待ち望んでいたのである。その都をもくろみ、また建てたのは、神である。二信仰によって、サラもまた、年をいたっていたが、種を宿す力を与えられた。約束をなさったかたは真実であると、信じていたからである。三このようにして、ひとりの死んだと同様な人から、天の星のうに、海べの数えがたい砂のように、おびただしい人が生れてきたのである。

三これらの人はみな、信仰をいだいて死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれを望み見て喜び、そして、地上では旅人であり寄留者であること、を、自ら言いあらわした。一四そう言いあらわすことによつて、彼らがふるさとを求めていることを示している。二五もしその出てきた所のことを考えていたなら、帰る機会はあったであらう。一六しかし実際、彼らが望んでいたのは、もっと良い、天にあるふるさとであった。だから神は、彼らの神と呼ばれても、それを恥とはされな

かった。事実、神は彼らのために、都を用意されていたのである。

一七信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクをささげた。すなわち、約束を受けていた彼が、そのひとり子をささげたのである。一八この子については、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるであろう」と言われていたのであった。一九彼は、神が死人の中から人をよみがえらせる力がある、と信じていたのである。だから彼は、いわば、イサクを生かえして渡されたわけである。二〇信仰によって、イサクは、きたるべきことについて、ヤコブとエサウとを祝福した。三信仰によつて、ヤコブは死のまぎわに、ヨセフの子らをひとりひとり祝福し、そしてそのつえのかしらによりかかって礼拝した。三信仰によつて、ヨセフはその臨終に、イスラエルの子らの出て行くことを思い、自分の骨のことに ついてさしずした。

三三信仰によつて、モーセの生れたとき、両親は、三か月のあいだ彼を隠した。それは、彼らが子供のうらわしいのを見たからである。彼らはまた、王の命令をも恐れなかった。二四信仰によつて、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、二五罪のはかない歡樂にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、二六キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考えた。それは、彼が報いを望み見て

いたからである。二七 信仰によって、彼は王の憤りをも恐れず、エジプトを立ち去った。彼は、見えないかたを見ているようにして、忍びとおした。二八 信仰によって、滅ぼす者が、長子らに手を下すことのないように、彼は過越を行い血を塗った。二九 信仰によって、人々は紅海をかわいた土地をとるように渡ったが、同じことを企てたエジプト人はおぼれ死んだ。三〇 信仰によって、エリコの城壁は、七日にわたってまわったために、くずれおちた。三一 信仰によって、遊女ラハブは、探りにきた者たちをおだやかに迎えたので、不従順な者どもと一緒に滅びることはなかった。三二 このほか、何を言おうか。もしギデオン、バラク、サムソン、エフタ、ダビデ、サムエル及び預言者たちについて語り出すなら、時間が足りないであろう。三三 彼らは信仰によって、国々を征服し、義を行い、約束のものを受け、ししの口をふさぎ、三火の勢いを消し、つるぎの刃をのがれ、弱いものは強くされ、戦いの勇者となり、他国の軍を退かせた。三五 女たちは、その死者たちをよみがえらせてもらった。ほかの者は、更にまさったいのちによみがえるために、拷問の苦しみに甘んじ、放免されることを願わなかった。三六 なおほかの者たちは、あざけられ、むち打たれ、しばり上げられ、投獄されるほどのめに会った。三七 あるいは、石で打たれ、さいなまれ、のこぎりで引かれ、つるぎで切り殺され、羊の皮や、やぎの皮を着て歩きまわり、無一物になり、

悩まされ、苦しめられ、三八 この世は彼らの住む所ではなかった、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまよい続けた。

三九 さて、これらの人々はみな、信仰によってあかしされたが、約束のものは受けなかった。四〇 神はわたしたちのために、さらに良いものをあらかじめ備えて下さっているのので、わたしたちをほかにしては彼らが全うされることはない。

第一二章 こういうわけで、わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。二 信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つ、走ろうではないか。彼は、自分の前におかれてゐる喜びのゆえに、恥をもいとわないで十字架を忍び、神の御座の右に座するに至ったのである。三 あなたがたは、弱り果てて意氣そそうしないために、罪人らのこのような反抗を耐え忍んだかたのことを、思いみるべきである。四 あなたがたは、罪と取り組んで戦う時、まだ血を流すほどの抵抗をしたことがない。五 また子たちに対するように、あなたがたに語られたこの勧めの言葉を忘れてゐる、

「わたしの子よ、

主の訓練を軽んじてはいけなない。

主に責められるとき、弱り果ててはならない。

六主は愛する者を訓練し、

受けいれるすべての子を、

むち打たれるのである。

七あなたがたは訓練として耐え忍びなさい。神はあなたがたを、子として取り扱っておられるのである。いったい、父に訓練されない子があるだろうか。八だれでも受ける訓練が、あなたがたに与えられないとすれば、それこそ、あなたがたは私生子であって、ほんとうの子ではない。九その上、肉親の父はわたしたちを訓練するのに、なお彼をうやまうとすれば、なおさら、わたしたちは、たましいの父に服従して、真に生きるべきではないか。一〇肉親の父は、しばらくの間、自分の考えに従って訓練を与えるが、たましいの父は、わたしたちの益のため、そのきよさにあずからせるために、そうされるのである。二すべての訓練は、当座は、喜ばしいものとは思われず、むしろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、それによって鍛えられる者に、平安な義の実を結ばせるようになる。

三それだから、あなたがたのなえた手と、弱くなっているひざとを、まっすぐにしなさい。四また、足のなえている者が踏みはずすことなく、むしろいやされるように、あなたがたの足のために、まっすぐな道をつくりなさい。五すべての人と相和し、また、自らきよくなるよ

うに努めなさい。きよくならなければ、だれも主を見ることはできない。一五気をつけて、神の恵みからめれることがないように、また、苦い根がはえ出て、あなたがたを悩まし、それによって多くの人が汚されることのないようにしなさい。一六また、一杯の食のために長子の権利を売ったエサウのように、不品行な俗悪な者にならないようにしなさい。一七あなたがたの知っているように、彼はその後、祝福を受け継ごうと願ったけれども、捨てられてしまい、涙を流してそれを求めたが、悔改めの機会を得なかったのである。

一八あなたがたが近づいているのは、手で触れることができ、火が燃え、黒雲や暗やみやあらしにつつまれ、一九また、ラッパの響や、聞いた者たちがそれ以上、耳にしたくないと願ったような言葉がひびいてきた山ではない。二〇そこでは、彼らは、「けものであっても、山に触れたら、石で打ち殺されてしまえ」という命令の言葉に、耐えることができなかったのである。三その光景が恐ろしかったのでモーセさえも、「わたしは恐ろしさのあまり、おののいてゐる」と言ったほどである。四しかしあなたがたが近づいているのは、シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、無数の天使の祝会、五天に登録されている長子たちの教会、万民の審判者なる神、全うされた義人の霊、六新しい契約の仲保者イエス、ならびに、アベルの血よりも力強く語るそそがれた血であ

る。二五 あなたがたは、語っておられるかたを拒むことがないように、注意しなさい。もし地上で御旨を告げた者を拒んだ人々が、罰をのがれることができなかったなら、天から告げ示すかたを退けるわたしたちは、なおさらそうなるのではないか。二六 あの時には、御声が地を震わせた。しかし今は、約束して言われた、「わたしはもう一度、地ばかりでなく天をも震わそう」。二七 この「もう一度」という言葉は、震われないものが残るために、震われるものが、造られたものとして取り除かれることを示している。二八 このように、わたしたちは震われない国を受けているのだから、感謝をしようではないか。そして感謝しつつ、恐れかしこみ、神に喜ばれるように、仕えていこう。二九 わたしたちの神は、実に、焼きつくす火である。

第一三章 一 兄弟愛を続けなさい。二 旅人をもてなすことを忘れてはならない。このようにして、ある人は、気づかないで御使たちをもてなした。三 獄につながれている人たちを、自分も一緒につながれている心持で思いやりなさい。また、自分も同じ肉体にある者だから、苦しめられている人たちのことを、心にとめなさい。四 すべての人は、結婚を重んずべきである。また寝床を汚してはならない。神は、不品行な者や姦淫をする者をさばかれる。五 金銭を愛することをしないで、自分の持っているもので満足しなさい。主は、「わたしは、決

してあなたを離れず、あなたを捨てない」と言われた。六 だから、わたしたちは、はばかりに言おう、「主はわたしの助け主である」。

わたしには恐れはない。

人は、わたしに何ができようか」。

七 神の言をあなたがたに語った指導者たちのことを、

いつも思い起しなさい。彼らの生活の最後を見て、その

信仰にならなさい。ハイエス・キリストは、きのうも、

きょうも、いつまでも変ることがない。九 さまざまな

違った教によって、迷わされてはならない。食物によら

ず、恵みによって、心を強くするがよい。食物によって

歩いた者は、益を得ることがなかった。一〇 わたしたちに

は一つの祭壇がある。幕屋で仕えている者たちは、その

祭壇の食物をたべる権利はない。二 なぜなら、大祭司に

よって罪のためにささげられるものの血は、聖所のな

かに携えて行かれるが、そのからだは、堂所の外で焼か

れてしまうからである。三 だから、イエスもまた、ご自

分の血で民をきよめるために、門の外で苦難を受けられ

たのである。四 したがって、わたしたちも、彼のはずか

しめを身に負い、堂所の外に出て、みもとに行こうでは

ないか。五 この地上には、永遠の都はない。きたらんと

する都こそ、わたしたちの求めているものである。一六

だから、わたしたちはイエスによって、さんびのいけにえ、

すなわち、彼の御名をたたえるくちびるの実を、たえず

